

2018年度 須磨学園中学校 入学試験問題 第1回

国語 出題意図

全体について

2018年度の問題作成にあたり、須磨学園のスローガンである「to be myself,...」に基づき、従来の方針や様式を継承しつつ、受験者の学力を検出できるよう配慮した。また、「知識を中心とした漏れのない基礎力」に基づき、「内容・表現・心情について深く思考し表現できる応用力」をどれだけバランス良く兼備しているのかを判定できる試験問題を目指した。

以下は、問題作成担当として、留意した点である。

- (1) 問題は、昨年度から「小問集合」を1題削って2題構成とし、「説明文」「小説文」の配列、150点の配点、60分の問題とした。
- (2) 出題範囲と問題構成は、受験者が学んだ基礎的かつ基本的な力が反映されるよう配慮した。受験者の思考過程に沿った設問及び設問形式となるように構成し、各設問の難易度のバランスを考え、識別力のある問題となるよう留意した。
- (3) 問題文や設問及び選択肢の吟味には、上記の学力を問うものなるよう細心の注意を払うとともに、リード文や注は受験者の理解の一助となるよう工夫した。

各問題について

㊦ 今福龍太「学問の殻を破る」からの出題。異文化に対する向き合い方について、東日本大震災を例に挙げながら、外の世界からの情報を遮断するのではなく、全身で受け止め、対話することの重要性を説いた文章である。本校の推進する国際理解教育に関連する重要なテーマではあるが、間接的には、中学入学後、まったく新しい世界に飛び込むことになる受験生に対して、どのように新しい生活を送ってもらいたいのかというメッセージとしてもふさわしいと考え、出題に至った。

問題は、基礎的知識の有無について問うたもの（問五、十）、前後の文脈を手がかりに傍線部の内容理解を問うているもの（問二、六、九）、傍線部の主張の根拠を問うたもの（問四、八）、論理的思考力を問うたもの（問一、三）に大別される。

新しい出題形式の特徴としては、問三のように、省略されている前提を、論理的観点から、記述形式で補うものである。これは、文章を受け身で読むのではなく、自ら疑問をもって、主体的に文章を読んでもらいたいという意図から出題した。

㊦ 長田弘「鳥」からの出題。幼い頃買った鶺鴒を、エサをたくさん食べさせてあげようとした母親の善意によって亡くしてしまったことを、忘れられない過去の記憶として綴った文章。短い内容ではあるが、行間に込められた鶺鴒への愛情や、亡くした喪失

感、忘れられない記憶をめぐる作者の想いを汲み取る読解力、読み取った内容を自分の言葉にできる表現力を受験生が備えているか確かめる適切な文章だと判断し、出題した。

問題は、行動と心情との結びつきに関する理解を問うた問題（問一、三、五）や、行間の意味を問うたもの（問二、七、八）を中心に、受験生の文脈推定力や表現力を試す創作問題（問六）も出題した。

なかでも新しい出題傾向を意識した問題として問十を作問した。「あなた自身の考えるところを…述べなさい」と問うことで、善意から鶉を死なせてしまった「母親」を、本文内容に基づいて、より適切に理解し、表現できるかを確認できる問題となったと考える。